

生物多様性の現状と 身近な生物を保全するこれからの活動



日本自然保護協会
生物多様性保全部長
出島誠一

かつては日本全国どこでも目にすることができた生き物が、次々と姿を消している。年を追うごとに絶滅が懸念される生物が増加している背景にあるものは何か。そして、地域の生物多様性をどのように保全していけばいいのだろうか。

はじめに

今年、二〇二〇年一月に名古屋で生物多様性条約の第一〇回締約国会議（以下、COP10）が開催されてから一〇年が経過した。COP10では、二〇二〇年を期限とした生態系保全の国際戦略「愛知目標」が採択され、日本は議長国としての大役を果たした。しかし、二〇一九年から今年にかけて行われている、世界的な評価において、「生物多様性と生態系の機能やサービスは世界的に悪化し続けている」状況で、「愛知目標は未達成」と評価された。

日本国内においても、生物多様性が悪化する状況が続いており、かつては普通に出会っていた身近な生物にも影響が確認されている。気象庁は一九五三年から全国で統一した観測方法で

組みが、結果として生物多様性の保全に繋がっている事例が見られている。

今回は、生物多様性の危機的な現状について世界と国内の状況について紹介するとともに、地域の魅力づくりに繋がる生物多様性保全の取り組みについて紹介したい。

世界的な生物多様性の状況

COP10から一〇年の節目となる今年一〇月までに、世界的な生物多様性の現状について二つレポートが公表されている。一つは、一三〇を超える加盟国を持つ独立した政府間組織であるIPBESによる「生物多様性と生態系サービスに関する地球規模評価（IPBESレポート）（二〇一九年五月）である。これは、世界中から選抜された約五〇〇人の研究者による地球規模の総合的な分析結果であり、この規模の評価は二〇〇五年のミレニアム生態系評価以来一五年ぶりとなる。もう一つは、国連生物多様性条約事務局が愛知目標の達成状況を評価した「地球規模生物多様性概況第五版（GBOS）（二〇二〇年一〇月）である。IPBESレポート、GBOS概要要約の日

でじま・せいいち

一九七五年島根県生まれ。一九九八年関西学院大学商学部卒業。野村総合研究所勤務後二〇〇四年東京環境工科専門学校卒業。二〇〇五年から公益財団法人日本自然保護協会に所属。群馬県みなかみ町での国有林の官民協働管理プロジェクト「赤谷プロジェクト」、絶滅の危機にあるイヌワシ、四国のツキノワグマ、サシバの保護活動を担当。

行ってきた生物季節観測の対象を五七種から六種に変更することを発表した。季節の遅れ・進み、気候の違い・変化を捉えることを目的とした観測で、花の開花や、鳥のさえずりなど、身近な生物を通じて季節を感じる生活情報としても利用されてきた。今回の変更では動物観測（二三種）がすべて廃止され、その理由を、気象台・観測所周辺の環境変化により対象種を見つけることが困難になったこととした。つまり、モンシロチョウやトカゲでさえ、観測所周辺で絶滅したり、数が減少したりしていることを示唆している。

一方で、自治体や地域住民によって、田畑や雑木林などの身近な自然環境が、一次生産物の付加価値の視点や、物質的ではない暮らしの豊かさ、子育て環境、心身の健康等の視点から見直されはじめています。自分たちの暮らし地域の魅力を磨き取り

本語版が環境省のウェブサイトで公開されている。IPBESレポートでは「生物多様性と生態系の機能やサービスは世界的に悪化し続けている」「このままでは、愛知目標等が掲げる社会や環境に関する国際的な目標の大方は達成できない」とした。たとえば、「世界で推計一〇〇万種がすでに絶滅の危機に瀕しており、生物多様性への脅威を取り除く行動をとらなければ、今後数十年でこれらの種の多くが絶滅する恐れがある。種が絶滅する速度は過去一〇〇〇万年の平均の少なくとも数十倍、あるいは数百倍に達しており、適切な対策を講じなければ今後さらに加速する」としている。

GBOSでは、愛知目標について「達成すべき要素をすべて満たした目標は一つもなく、二〇の目標のうち、部分的に達成した目標はわずか六つである」として愛知目標は「目標未達」という評価である。また、近年目にする事が多い「国連持続可能な開発目標（SDGs）」の自然環境に関わる部分は愛知目標を踏襲した目標設定であることから、現状のままではSDGsの達成も危うい「生物多様性の劣化傾向は二〇五〇年以降も続く見込みである」としている。その上で、二〇五〇年までに自然との共生というビジョンを達成するためには、人間活動の「今までのとおり」から脱却する社会変革が必要で、人間活動があらゆる面において生態系に依存していることを認識し、自然環境や生物多様性の保全や再生だけではなく、気候変動対策、汚